

<< 住んで良かった長野市を目指して >>

NHK テレビ番組 クローズアップ現代

2009年10月5日(月)19:30~20:00 放映

「苦情殺到 !! 公園の騒音 訴訟も」

この番組では、

人が公園を訪れる目的と公園の利用の仕方は多種多様であり、さまざまな問題が起きる。子供たちが元気に遊んでいる場面を微笑ましく感じる人と、その遊び声を騒音として訴える人がいる。

公園でボードを楽しみたい若者達、ボール遊びや自転車乗りを楽しむ少年達。これらの行為を、迷惑だ、危険だ、うるさいと訴える人がいる。

通常、このような問題の解決方法は、公園の管理者が「公園内での禁止事項」を書き並べた掲示板を数多く設置する事だけが、これまでの解決手法である。

これは、苦情があった行為を禁止事項に加えるだけの「禁止管理」である。

苦情があれば、それ等の遊びや行為を禁止するだけなら「死んだ公園」であり、現在の長野市の公園は「禁止・規制の管理」に当たる。

番組では、このような問題の解決に際して地域の協力者と多くの智慧を集めて、苦情のあった遊びや、行為等を禁止するのではなく、正しく指導したり、組織化した結果、地域の核となる公園や広場に生まれ変わった経緯を見せた。これは「活用管理」であり、「生きた公園」である。

一例として、ボードの苦情への対応は指導者が子供たちへ正しい乗り方とマナーを教え、コンパクトだが公園内へ専用の練習場を作ったところ、「孫にも教えて欲しい」との要望があるほどになった。

NHK テレビの当該番組を参考にして「活用思考」により長野市内の公園を老若男女が集える、楽しい、「生きた公園」にしたい。

京都御苑には地域の人々による自治組織があり、数十人の犬連れが苑内を清掃活動している現場を見た。

この活動は、周辺に住む人々の自主的な活動です。

公園に関する事例ではないが、NHK のテレビ番組で、難問解決の実例として「ご近所の底力」がある。

番組の開始にはテーマである難問が提示されるが、毎回、「こんな難問が解決できるのか」と思う。番組の進行につれて解決の方法が見えてくる。

その解決方法は番組のタイトルが示しているように住民参加型の「ご近所の底力」である。

「ご近所の底力」は、長野市にも実例がある。

その実例は、長野市上野区で一人の女性が勇気を奮い、呼びかけて始った。呼びかけのタイトルは、《 私たちの手で我が町 上野区の「犬のウンチ」を拾いませんか 》であり、サブタイトルは《 住んで良かった上野区を目指して 》である。

提案者の NK さんは、誰もが嫌う「犬のウンチ拾い」などに賛同してくれる人がいるだろうかと悩んだ末に、勇気を奮って呼びかけたところ、すぐに 10 名ほどの賛同者が現れて活動を開始した。呼びかけた人も賛同した人も立派だ。

「信州人は評論ばかりで行動しない」との定説があり、それだけならまだしも、「足を引っ張る」とまで言われている。かく言う当方も長野市生まれの生粋の信州人であり、この定説に頷きながら、長年、暮らしてきた。

その信州・長野市で異色の活動が定着した。

その活動が発展して「上野区愛犬クラブ」となり、2009年9月27日の上野区自主防災訓練の中で、災害時に人と犬が共に避難することが出来る「愛犬の一時預かり」訓練を行い反響が広がっている。

県内では初めて、全国でも稀な訓練の様子は、信濃毎日新聞、中日新聞に掲載され、INC 長野ケーブルテレビで放映されました。

「上野区愛犬クラブ」は、個々に毎日の散歩の時にも徹底的にウンチとゴミを拾うことにより上野区全体が清潔な町になり、この活動を知って参加する人も日増しに増え続けています。これこそが、草の根から始めた地域住民の力であり「ご近所の底力」です。

私たちは「犬連れの公園開放」を一方向的に主張するのではなく、公園周辺に住む住民の「ご近所の底力」を組み合わせた解決方法を提案します。

この件について「話し合いの場」を設けていただき、「禁止するだけの管理」から「ご近所の底力により、公園を生かすための管理」への転換を要望します。

今や 観光地に《ドッグラン》は必須の施設です

犬連れで善光寺を訪れる観光客は多い。その日の宿泊先を聞くと、決まって、「犬と一緒に宿泊します」と笑顔の答えが返ってくる。

最近では、「善光寺の近くにドッグランはありませんか」と聞かれるようになった。インターネットと愛犬雑誌には、「犬連れの宿泊施設」や「ドッグラン」の情報が詳しく掲載されており、愛犬家はそれらの施設を巡りながら旅の計画を立てる。

自動車道のパーキングエリアにも誘客のためにドッグランを設置する時代となった中で、善光寺周辺の参拝ルートにも是非とも必要な施設である。

善光寺を目指して走り続けた長距離ドライブの疲れを癒すべく、犬連れで城山公園へ入ろうとした観光客が、「この公園は犬連れ禁止です」と注意されて、驚き、呆れ、怒る場面も日常の風景となった。

家族である愛犬と一緒に旅を楽しむために、はるばる訪れた旅先の地で地元の人から言われた思いがけない一言、思いやりの心が無い長野市の施策が、どれほど旅人の心に突き刺さり、悪い評判となるかを考えてください。

オリンピックを開催して国際都市を標榜し、観光を主要産業とする県都が昭和38年、半世紀前に施行された長野市都市公園条例に固執して、折角、当地を訪れた観光客の心へ深い傷跡を残しているのです。

生活スタイルも、旅のスタイルも、50年前とはまったく変わりました。

50年間、変わらないのは長野市の姿勢であり、観光都市として最も大切な「細やかな、もてなしの心」が欠落しているのではないのでしょうか。

善光寺に隣接する城山公園を早急に「犬連れ散歩を可能」にする必要があります。並行して、「ドッグラン」の設置も急務です。

ここまで増えた「犬連れの旅行者」を無視して観光は成り立ちません。

資料 ・ 2009/10/21(水)放映の「クローズアップ現代」では、
今、日本の家庭は、四世帯に一世帯が犬を飼っていると。